

# せいげん 宮平盛彦さん

1930(昭和5)年9月生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍

所属 第32軍 電信36連隊

第6中隊

戦地 首里、山城・摩文仁(糸満市)、  
津嘉山(南風原町)



## ●6月下旬、解散命令（別のパネルからの続き）

喜屋武岬(⑤)の先端、10mぐらいの崖の中腹あたりに入れそうな壕に隠れたりしていたんだけど、危ないものですから、夜、上に上がって、熱帯のヤシの木みたいなアダンという木が密集したジャングルみたいな所に隠れて。

## ●8月15日夜、東風平(こちんだ⑥)の壕から、米軍の祝砲が見えた

1カ月ぐらいそのジャングルにいた。あたりが静かになっていて、腹へったもなく、悲しいもなく、虚脱状態でした。8月4日か5日か・・・10日ごろかな、北部に行こうと、曹長とふたりで、夜、真っ暗になってから。敗残兵がウロウロしているから、東風平にいて壕に隠れていたら、通信隊のメンバー6名と遭遇して。大きい壕があったのでそこに隠れていたら、与那原(東風平の東)の空にもものすごいサーチライトの光がバラバラッとやるんです。何だろう？特攻隊きてるのかなと思ったですよ。それが8月15日のことだった。後で分かったんですが、米軍が勝ったお祝いをしていただいそうです。祝砲ですよ。艦船からね、祝砲あげて。

## ●8月下旬、南風原町の津嘉山(つかざん⑦)の壕へ北上

東風平に1週間以上いて、他の人は誘ったけどついて来なかった。僕は曹長と一緒に北上しました。津嘉山といって僕が入隊した6中隊の壕の近くで、元の軍司令部の大きな壕があいていて、食料の集積所があったんですよ。「その食糧などまだ使えるな」と曹長が行こうと言うので行きました。木の枠が焼けて崩れていたけど中に人がいた。合い言葉を言って、中の人と合流したら、そこから先は通りにくいということだった。

あの頃は、与那原あたりから、米軍が24時間ひっきりなしに資材運びのために道路なんか整地して、ほんとに24時間働いていました。もう本土へ攻めの準備ですよ。これ以上は北上できないというので、そこにいた。

## ●「戦争に負けたんだ」

6中隊の壕に行き荷物を持って来ようとして、その壕を出て道に出たら、後ろから「オーイ、オーイ、オーイ」と声掛ける人がいて。「戦争負けたんだ」と、投降をすすめる呼びかけだったらしいです。僕ら何がなんだか分からないから逃げて、僕は曹長とはぐれて、曹長はそのまま北部に行って、僕は六中隊の壕に逃げている、二週間ぐらい離ればなれになっていた。僕はツクンダ(?)の大きい壕に合流して待っていたら、曹長は帰ってきて、「北部には行けない。行っても無駄だとわかって帰って来た」と言われた。そいでまた一緒になったんです。灯油が不自由ぐらいで、食料も水もありで、外にも出ないもんだから、外部とも接触なしで、じっと中で暮らしていた。10月半ばごろまで。

## ●投降を呼びかけに来た下士官を射殺

壕の中に、投降を呼び掛ける人が入って来たんです。知らんうちに。兵隊が出て行って会って話すんです。そしたら、「日本は戦争には負けたから、投降者であって、捕虜ではない。皆元気な人は集合場所に集まって、本土に帰る準備をしている」というようなことを話して。でもこちらの皆は、これはアメリカのスパイだとか考えていなかった。

ここは入口はいくつもあって、彼らが入ってきた壕の入り口を、外から回って出られないように、出口をふさいだ。話は聞いて、「じゃあ、明日出るから、迎えに来るんだな」と約束して、出口の方に出しておきながら、米軍の連発銃を持ってきて、二人の呼びかけ人の後ろから打って殺した。近くからですよ。

彼らには人を救えたという喜びがあったでしょう。いそいそと帰っていったら、後ろからやられたんですよ。一人は、「天皇陛下万歳」と叫びましたよ。

みんな気まずい思いで、死体を見えない所に隠して、そのことについてはかん口令を敷いてしまったんですよ。しかしあとで聞いたら収容所で、やっていただろうという話は出たそうです。というのは分かるわけですよ

この亡くなった人は、学校の先生で、出世して中尉さんでした。当時の呼びかけは、兵隊ではなく下士官がやっていました。少尉、中尉という人が率先してやっていました。

(取材日:2013年2月7日)